

福沢諭吉の自治観

——初期の著作にみる市民的自治論の萌芽——

石
川
一
三
夫

はじめに

- 一 西洋文明と自治都市
 - 二 自治都市とミドルクラスの活躍
 - 三 国民国家と地方自治
 - 四 名分論批判とルールの精神
 - 五 権力偏重批判と人間交際概念
 - 六 ミドルクラスへの期待と不安
 - 七 国民国家の基盤を求めて
- おわりに

はじめに

(1) 福沢諭吉が地方自治論をテーマにして書いた論文は、『分権論』(明治一〇年)だけである。しかし、地方自治に言及している論文は『通俗民権論』(明治二年)や『国会の前途』(明治三年)など多数存在しており、その全体像を把握するのは必ずしも容易ではない。個々ばらばらに論文の意図を紹介していたのではとても全体像を描くことができないからである。それでは、どのようにすれば福沢の地方自治論を体系的に紹介することができるであろうか。一般にある思想を紹介するには、第一に思想そのものに内在する思维方法や価値意識を明らかにしようとする視点からのものと、第二にその思想の歴史的役割や限界を明らかにしようとする視点からのものが有力であるが、いずれも一長一短が認められるようである。^①したがって、もっとも無難な方法としては、個々の論文が書かれた時代的背景を念頭に置いた編年史的記述をベースにしながら、同時に思维方法や価値意識など不変のものにも注意して全体像を再構成するという折衷スタイルが考えられるであろう。

本稿はそうした折衷スタイルによって、幕末から「立憲政体ノ詔書」が出された一八七五(明治八)年頃^②までの福沢諭吉の地方自治観を概観しようとする一試論である。つまり、本稿はいわば序章とでもいうべきものであって、ここでは福沢のその後の地方自治論を理解するうえでの問題の所在を提示することが主眼となる。

(2) 本稿が対象とする明治初期においては、まだ福沢の地方自治論を体系的に叙述することができない。わずかに、生成途上にある福沢の地方自治観——市民的自治論の萌芽——を語りうるに過ぎない。そこで本稿では、まず第一章——第三章において福沢が西洋の市民的自治に対してどのような理解に達していたかを紹介し、彼の地方自治観の源流を

確認する。ついで第四章以下では叙述の対象を西洋から日本に移して、福沢が西洋の市民的自治から学びとった命題をもとに日本の実態をいかに観察しいかに批判していくかを素描し、福沢の市民的自治論が徐々に形成されていく過程をあとづけたいと思う。

福沢諭吉の著作集は実に膨大であるが、これまで誰もが引用したことのない文章というものにはもう出会うことがないかもしれない。だがそれにもかかわらず、滋味豊かな福沢の理論を地方自治論に引き付けて再構成してみるならば、これまでの研究によってはついぞ見えなかった部分が改めて見えてくるということもあるのではないだろうか。^③これが本稿執筆に際しての私の願いである。

〔注〕

〔1〕 松本三之介『明治精神の構造』（日本放送出版会、一九八一年）、九一―一八頁参照。遠山茂樹『福沢諭吉』（東京大学出版会、一九七〇年）、三一―一七頁参照。

〔2〕 一八七五（明治八）年は、大阪会議を経て元老院・大審院・地方官会議が開設された年で、明治前期における第一の転換期にあたる。また同年は明六社の解散により、近代的市民社会の実現を共通の目標とする啓蒙主義の時代が終焉し、上流民権と下流民権の対立、デモクラシーとナショナリズムの分化が始まったという意味でも、第一の転換期をなす年である（宮川透『明治維新と日本の啓蒙主義』、現代日本思想史Ⅰ、青木書店、一九七二年、一四六―一四八頁参照）。

〔3〕 従来、福沢の地方自治論を正面から取り上げた研究は存在しない。しかし、解説などの形で福沢の地方自治論に言及した論文は散見することができよう。たとえば遠山茂樹『福沢諭吉』は、「民権の基盤たる人民自治の伸張」をはかることが福沢地方自治論の目的ではなく、「士族の政治活動の分野を地方自治に誘導し、政府との抗争を回避せようとする」ものであるとして、地方自治を一つの「方便」としてとらえる視点を批判している（二二―二三頁）。また田中重博「地方自治理論史」（島恭彦・池上惇・遠藤晃『自治体問題講座』第一巻、自治体研究社、一九七九年）も、福沢の地方自治論を官僚的自治思想に対抗する先見の明に富む民主的自治思想の一つとして評価しつつも、「自由主義的な啓蒙家にふさわしく、その立場はきわめてあいまいである」（七二頁）と批判的である。こうした批判的評価が多いなか、辻清明『日本の地方自

資料1 ムニシパリチー

諸国にて古風旧例より良法の生ずること甚多く、就中人の職分を異にするに従て党類を分つの風習は、世の爲めに大に益あり。其一類の内には、自から一種の権を具へて政府過分の威力を稍々抑制し、恰も政府中に一の小政府を起したる姿にて、国民の保護を爲すこと少なからず。往古草昧のとき、寺院の僧徒に權威ありしは其一例なり。方今にても、各都各府に自から一種の殊典を具へて、政府の威力を以て圧倒す可らざるものあり。又ムニシパリチーと云ふことあり。これは市民会同の義にて、元と羅馬の時代より始り、其後漸く歐羅巴の諸邦に流行せり。即ち市民の業を営むもの、同心協力して法を設け、専ら之に依頼して生を安んずる所以なり。故に猛悪凶暴の武士等、一個の市人に向て之を凌圧するは容易なりと雖ども、斬く一般の法を以て相合衆せるが故に、敢て害を加ること能はざりと云ふ。

『西洋事情外編』、選集①210頁、全集①428頁。

治』(岩波書店、一九七六年)は、近代日本においては個人の自発的連帯が形成する「社会」の觀念が過小化し、そのことが自主的存在としての地方自治体の発展に少なからぬ障害になったが、そうした現実をいち早く見抜いていた点に福沢自治論の卓越さが認められると評価している(二二〇—二二二頁)。

一 西洋文明と自治都市

ムニシパリチーの評価 福沢諭吉が最初に自治都市の紹介という形で地方自治の源流に言及したのは、『西洋事情外編』卷之二(慶応四年)においてである。同書は一八六二(文久二)年のヨーロッパ巡歴の際にイギリスで購入したチェンバースの『経済学』^①をほぼ忠実に翻訳したものであるが、これがおそらくわが国における地方自治論の嚆矢であろう。当時はまだ「フリーダム」freedom や「リベルチ」liberty の訳語も定まっておらず、^②「セルフ・ガウルメント」self-government を「自主宰」、^③「パリシ」parish を「氏子地」と訳すような時代であった。福沢の自治都市紹介がいかに先駆的なものであったかが理解できるであらう(資料1参照)。

福沢諭吉の自治都市に対する理解はかなり正確で、今日の私たちが普通に有している知識とそう大差がない。福沢はまず、中央権力の抑

制という観点から、西洋の伝統の中に見られた地域的・身分的特権の一つである「ムニシパリティー」municipalityを高く評価し、それに「市民会同」という訳語をあてている。そして、この市民会同、すなわち外国貿易や交戦権を保有する自治都市は、ベネチア、ジェノバなど北イタリアにおいてもっとも盛んで、ついでハンブルクやリュベック、ブレーメンなどハンザー同盟を結成していた北ドイツにおいても一大勢力を有する存在であったと紹介している。また福沢はイギリスにも言及し、ロンドンの自治権はイタリアやドイツほどには強力でなかったが、今日なお国王がロンドン市内を通過するときには市の総督に免許を請わなければならないほどで、その特権は無視できないものがあると紹介している。^④

自治都市の歴史的役割 それでは、自治都市が果たした歴史的役割について、福沢諭吉はどのような認識に達していたであろうか。これについて福沢は『西洋事情外編』巻之二の中で、市民の会同が各地に起って独立の体裁を成し、各々一局の中心において自らの公共事務に責任をもつという伝統が形成されたため、国家の構成がいわば多元的となつて市民の権利を保障するうえで大きな役割を果たしたと述べている。あわせて、自治都市の存在が不意の騒乱（革命）を防ぐうえにおいても力を発揮し、そうした伝統のないフランスでは中央政府がひとたび倒壊すれば全国中が一度に戦場となり、騒乱が絶えなかったとも紹介している。^⑤

注目すべきは、福沢がイギリスとフランスを比較し、フランスにおいては中央政府が地方の権限を過度に掌握しているため今日なお社会不和が絶えないが、イギリスではたとえば「ロカル・マジストレート」local magistrate や「ポリス・コミッショネル」police commissioner など、自治都市の伝統を継承した市民参加（公務の委任）の制度が定着しているため、国家と社会が調和的に発展していると述べている点であろう。^⑥

福沢がイギリスの都市史から学んだことは、第一に貧民救済・教育・衛生・水道・警察など実に多くのことが公共の

責任として処理されているということであり、第二に公共事務の実施にあたって立法権を司るのは中央であるが、その具体的執行は地方に委任されているという事実であった。⁽⁷⁾ 福沢はイギリスの都市行政をやや詳しく紹介したあとで、「法を以て之を定むるも、却て世上の不便たることあらば、速かに政府の關係を脱して国民の随意に之を行はしむ可し。政府にて国民の為に勉て事を為すの弊は、懈て事を為さざるの害に異ならず」とまとめている。これは、政府と自治体と市民という三者のバランス——福沢の表現によれば中庸——を得ることの重要性を示唆した箇所であられるものである。

市民の発見 福沢諭吉がわが国で最初に西洋の自治都市を紹介し、そこに多元的構成をもつ西洋の近代精神の源泉を発見して、それに高い評価を与えたという事実はしっかりと記憶されるべきであろう。また、とくに *burghess* や *citizen* の訳語に「市民」という語を用いて、それをキー・タームにしている点にも注目すべきであろう。「市民」という概念を今日のわれわれが理解しているのと同じ意味で使用したのは福沢諭吉が最初であった、と丸山眞男氏は述べている。⁽⁸⁾

幕末の日本人が西洋を訪れて驚くことは数多くあったが、なかでも理解することがむずかしかったのは「物」ではなく「ものの見方」であったといわれている。とくに前記の「フリーダム」や「リベルチ」の理解には苦心したようであるが、この外国語をいち早く「自任意」と規定し、「国法寛にして人を束縛せず、人々自から其所好を為し」⁽⁹⁾「毫も他人の自由を妨げずして、天稟の才力を伸べしむるを趣旨とす」という表現で、内実に富んだ定義を与えたのは福沢諭吉であった。自由と我儘の違いを明確にし、自由の意義を精力的に説いたこと自体すでに福沢が近代日本のパイオニア的思想家であったことの証左となるわけであるが、そのことにとどまらず、さらに彼が「フリーダム」や「リベルチ」という觀念の背景に西洋の風俗と慣習の連綿たる存在を発見し、そのうえで自治都市の伝統と市民の歴

史的役割にまで思い至ったという事実は、彼のすぐれた洞察力を示すものとしてとくに注目すべきことであるといえよう。¹¹⁾

『西洋事情外編』巻之二を執筆した段階では、福沢諭吉はまだ地方自治論といえるほどのものを積極的に論じているわけではない。しかし、多元的権力論者として自らを形成しつつあった福沢にとって、西洋の自治都市と市民から学ぶことのできる諸命題はきわめて貴重であり、それがその後の福沢理論のモチーフとなることはあとで見えていくとおりである。自治都市の発生と市民の存在をその内に抱えて多元的展開を見せた西洋の歴史は、福沢にとってまさに自主自由とは何かを学ぶ格好の教材であったといわなければならないのである。¹²⁾

〔注〕

- (1) Chambers' Education Course, political economy for use in schools, and for private instruction, 1856.
- (2) 福沢は一八六六（慶応二）年に発行した『西洋事情外編』巻之一の中で、「自主任意、自由の字は、我儘放盪にて国法をも恐れずとの義に非らず。総て其国に居り人と交て気兼ね遠慮なく自力丈け存分のことをなすべしとの趣意なり。英語に之をフリードム又はリベルチと云ふ。未だ的当の訳字あらず」（選集①一〇四頁、全集①二九〇頁）と述べている。ただし、一八六九（明治二）年に出版した『西洋事情二編』巻之二の例言（全集①四八六―四八八頁）においては、「リベルチ」に自由、「ライト」に通義という訳語をあてて、詳細な解説を付している。
- (3) ホンブランク著・鈴木唯一訳『英政如何』（慶応四年）、『明治文化全集』第三巻、政治篇（日本評論社、一九六七年）所収。

- (4) 『西洋事情外編』選集①二一〇―二二二頁「全集①四二九頁」参照。
- (5) 同右、選集①二二二頁「全集①四二九頁」参照。
- (6) 同右、選集①二二八頁「全集①四二九頁」参照。
- (7) 同右、選集①二二一―二三四頁「全集①四三七―四四九頁」参照。

(8) 同右、二三一頁。

(9) 丸山真男『文明論之概略を読む』下巻(岩波書店、一九八六年)、三七頁、一一七頁参照。

(10) 『西洋事情外編』、選集①一〇三頁[全集①二九〇頁]。

(11) 福沢が『西洋事情外編』卷之二の中で自治都市を紹介しているのは「国法及び風俗」の章で、それは彼が参考にしたチェンバーズの前掲書では、*Laws and National Institution* の章に該当する。同章の趣旨はイギリスが誇る伝統の評価ということで、そこには「今英国に於て尽善尽美の制度と称するものも、其本を尋れば往古の風俗より来りしもの多し。故に此風俗の沿革を探索するは最も大切なことにて、且つ之に由て考れば、世の文明を進めんとするには、学者の高論に従て法を造るより、寧ろ蒙昧夷俗の風を改正するの便利なるに若かずとの理を了解す可し」(選集①二〇六頁、全集①四二四—四二五頁)との主張が見られる。そうした主張を推し進めていくと、ムニシパリチーの評価にまでたどりつくことは資料1によって明らかであろう。

(12) 福沢における西洋理論の継受については、伊藤正雄『福澤諭吉考』(吉川弘文館、一九六九年)の他、たとえば石田雄「福沢における文化接触と創造的思考」(近代日本思想大系2『福澤諭吉』解説、筑摩書房、一九七五年)参照。また安西敏三「福澤諭吉とA・D・トックヴィル『アメリカにおけるデモクラシー』序説」(『福澤諭吉年鑑』第六巻、福澤諭吉協会、一九七九年)や、同「福澤諭吉とJ・S・ミル『功利主義』」(甲南法学、第三二巻第一号)といった詳細な実証的研究も貴重である。

二 自治都市とミドルクラスの活躍

フリー・シチは民政の元素 一八七五(明治八)年、福澤諭吉は『文明論之概略』を出版した。唯一の理論的体系書である。この中で福沢は西洋の自治都市をふたたび取り上げ、それをより理論的な形で展開している。

福沢はまず自治都市の歴史に言及し、①商業が発達して市邑が生じたこと、②それが封建諸侯の収奪に抗して城壁を設けたこと、③王侯貴族といえども都市を制することができず条約(特許状)によってその自立を認めざるをえな

資料2 自治都市の発達

蓋し此市民の相集て群を成すや、其初に於ては決して有力なるものに非ず。野蠻の武人、昔年の有様を回顧して、乱暴掠奪の愉快を忘るゝこと能はずと雖ども、時勢既に定れば遠く出るに由なく、其近傍に在て掠奪を恣にする可き相手は、唯一種の市民あるのみ。市民の目を以て封建の貴族武人を見れば、物を売るときは客の如く、物を奪はるゝときは強盜の如くなるが故に、商売を以て之に交ると雖ども、兼て又其乱暴を防ぐの備を為さざる可らず。乃ち市邑の周圍に城郭を築き、城中の住民は互に相助て外敵を防ぎ、以て利害を共にするの趣向にて、大会のときには鐘を鳴らして住民を集め、互に異心なきを誓ふて信を表し、此会同のときに於て、衆庶の内より人物数名を撰び、城中の頭取と為して、攻防の政を司らしむるの風なり。此頭取なる者、既に撰挙に当て権を執るときは、其專制、意の如くならざるはなし。殆ど立君特裁の体なれども、唯市民の権を以て、更に他人を撰挙して、之に代らしむるの定限あり。……市民、相集て公会を結び、其勢力漸く盛にして、……王侯貴族も之を制すること能はず、更に条約を結て其自立を認め、各市邑に城郭を築き、兵備を置き、法律を設け、政令を行ふことを許して、恰も独立国の体裁を成すに至れり。

『文明論之概略』、選集④165—166頁、全集④138—139頁。

かったこと、④かくして市邑に城壁を設ける権利だけでなく、独自の兵備を有して立法と行政の権利をもつ独立国のような都市が誕生するに至ったこと、⑤都市は市民の誓約と団結を基礎にして運営されていたこと、⑥頭取（市長）は専制君主のような強い権限を有していたが、その地位は市民によって選出され解任されるものでしかなかったこと、等々を指摘する（資料2参照）。

ついで、イタリアのミラノ、ロンバルディア、ドイツのリュールベック、ハンブルグ、さらにはハンザー同盟の歴史を簡単に紹介し、初めて「フリー・シチ」free city という明確な言葉を使って、「フリー・シチは自由なる市邑の義にて、其人民は即ち独立の市民なり」と定義している。そして、フリー・シチは「民政の元素」^②であったことが明記されているのである。

ミドルクラスの役割 福沢諭吉が自治都市を高く評価した理由は何か。それは、西洋文明史の担い手としての市民、とくに近代都市の市民であるミドルクラスの活躍に注目したからである。^③

福沢はすでに『学問のすゝめ』の中で西洋の「ミッドルカラス」middle class^④に言及していたが、『文明論之概略』においてもふたたびミドルクラス論を展開している。その論旨は、①ミドルクラスの淵源は古代・中世の独立市民に求められること、②彼ら古代・中世の独立市民は他に依頼するのではなく、本業としての商業にたずさわる階級であったこと、③近代に至ると英仏その他の国々においては独立市民の伝統を受け継ぐミドルクラスが次第に富を貯え、その品行を高くしたこと、④近代のミドルクラスは小民を抑圧するためなく、自己の地位を全うするために中央の圧政に抗して戦う自律的存在であったこと、⑤ミドルクラスが大切にした地位とは、「ロカラインテレスト」local interest と「カラッスインテレスト」class interest であったこと、⑥それらの地位は住居を共にするとか、営業を共にする等の交情（自発的連帯）を基盤にしていたこと、⑦そして、そうした連帯と戦いこそが、地方自治だけでなく立憲制や議会制の発達を促す要因にもなったこと、等々であった（資料3参照）。

福沢が資料3に掲げたような生き生きとした文章でミドルクラス論の積極的展開を試みたのは、「ロカル」すなわち都市の担い手であるとともに、「カラッス」すなわち商工業の担い手でもあった西洋のミドルクラスの存在に、読者の注意を引きつけたからであろう。^⑤と同時に、生活を共にし営業を共にすることからくる「交情」を基盤になされる市民の権利闘争にも注意を喚起したかったのである。すなわち、福沢が西洋の都市史から学んだ一つの貴重な事実は、「自家の利益を保護」し「自家の説を主張」するミドルクラスの自律的活動が、権力の集中を批判する政治活動をもたらし、ひいては自治制だけでなく立憲制や議会制の発達を促すエネルギー源にもなりえたという点であった。^⑥この市民の非政治的立場からする権力批判をとくに高く評価しようとする発想は、その後の福沢理論において底流的位置を占めることになるわけであるが、それは福沢の地方自治観を理解するうえにおいても見逃すことのできない側面である。

資料3 「ロカルインテレスト」と

「カラッスインテレスト」

近世に至り英仏其他の国々に於て、中等の人民、次第に富を致して、随て又其品行を高くし、議院等に在て論説の喧しきものあるも、唯政府の権を争ふて小民を圧政するの力を貪らんとするに非ず、自から自分の地位の利を全ふして、他人の圧政を圧政せんがために勉強するの趣意のみ。其地位の利とは、地方に就てはロカルインテレストあり、職業に就てはカラッスインテレストあり、各其人の住居する地方、又は其營業を共にする等の交情に由て、各自家の説を主張し、自家の利益を保護し、之がためには或は一命をも棄る者なきに非ず。此趣を見れば、古来日本人が自分の地位を顧みずして便利の方に付き、他に依頼して權力を求る歟、或は他人に依頼せざれば、自から他に代て他の事を為し、暴を以て暴に易へんとするが如きは、鄙劣の甚しきものなり。之を西洋独立の人民に比すれば、雲壤の相違と云はざる可らず。

『文明論之概略』、選集④185頁、全集④155—156頁。

〔注〕

- (1) 『文明論之概略』、選集④一六六頁「全集④一五五—一五八頁」。
- (2) 同右。
- (3) 三成賢次「近代プロイセンの名望家自治—その法構造と日本への継受」(阪大法學、第四一卷第一号、一九九一年)は、西洋において名望家自治が語られるときには「市民階級の自覺的な市政参加」というプラス面が強調されるが、日本においては「官僚支配の末端を補完する抑圧機能」というマイナス面が強調される傾向が強いと指摘している。また西洋においては都市自治の研究が中心であるが、日本では農村自治の研究が中心であるとも指摘している。いずれも深めて検討してみるに値する重要な指摘といえよう。日本において名望家自治に対するイメージがいつ頃からマイナスに転じたのか、そしてまた日本においてはなぜ農村自治が議論の中心を占めることになったのか、等々については続稿でふれるつもりである。
- (4) 『学問のすゝめ』、選集③八九—九〇頁「全集③六〇—六一頁」参照。
- (5) 増田四郎氏は西洋における常識的「市民感覚」について次のように述べている。「西洋の近代思想の構造を大ざっぱにいうと、それは一方には国家というものがあつて、その他方には階級、即ち近世においては特にブルジョワジーと解釈した意味での市民社会が存在する。それからさらにそれらと並んで、階級でもなく国家でもない、コミュニティ、即ち共同体という考え方があつて、それがシティズン、市民権

を持っているものの集団という意識が強く、それに基づいて日常の生活が営まれている。つまり国家で一色に塗りつぶされている国民としての個人があるのではなく、個人は国家の一員であるとともに階級の一員であり、また具体的な共同体の一員であると考えられている。そういう構造をもって、そこにヨーロッパの近代社会の原理が論議せられ、あるいは戦わされる。このような形が、ヨーロッパ人のきわめて常識的な生活感情となっていると思うわけである。」(『都市』、筑摩書房、一九七八年、二七頁)

(6) 丸山真男『文明論之概略を読む』下巻(岩波書店、一九八六年)、一一七頁参照。

三 国民国家と地方自治

自由主義の精髓 以上見てきたように、西洋の市民的自治都市はそれ自体として称賛に値するものであった。だがそのことにとどまらず、西洋の市民的自治都市は、多元的価値観をもって構成される西洋文明の形成を促し支える決定的要素であった、という点が看過されてはならないであろう。

福沢諭吉は『文明論之概略』の中で言っている。西洋文明が他と異なるところは「人間の交際に於て其説一様ならず、諸説互に並立して互に和することなきの一事に在り^①」と。西洋においては、たとえば政治と宗教が分離しており、また政治の世界においても君主と貴族、そして市民がその赴くところに赴き、各々その主張するところを主張して互に争うという歴史を展開してきた。しかし、その勝敗は容易に決着せず、たとえ不平であっても各々が共存せざるをえないバランス状態が恒常化し、そこに「我に全勝の勢を得ずして、他の所為^{しよゐ}を許すの場合に至れば、各自家の説を張て文明の一局を働き、遂には合して一と為る可し^②」という寛大の精神が生まれた。福沢はギゾーの『ヨーロッパ文明史^③』に依拠しながらこのように述べたあとで、これすなわち自主自由の生じる由縁なりと結論づけている。

このような結論に達した福沢は、西洋の歴史的伝統の中から、

①「文明は多事の際に進むものなり。多事なれば、各種の元素、互に其権力の平均を得べし。」⁽⁴⁾

②「競争は相抗するの義なり。同等同権の義なり。レシプロシチの在る処なり。レスペクトの生ずる源なり。」⁽⁵⁾

③「ヂッフエレンチエーションは文明の要訣なり。政府は手を引て私の世界に事を分たざる可らず。」⁽⁶⁾

などの命題を抽出して自由主義の精髓としている。そして、それらをモチーフとして『文明論之概略』を著し、「自由の気風は唯多事争論の間に在て存する」という有名な逆説的命題を提起して福沢理論の終生の基軸としたわけであるが、そうした自由主義的思想の基礎にあって、いわばその扇の要とでもいうべき位置に彼の都市理解（理想としての市民像）があったという事実はとくに重要である。「権力の平均」「競争」「同等同権」「レシプロシチ」reciprocity「レスペクト」respect「ヂッフエレンチエーション」differentiation「私の世界」等々、そのどれを取ってみても、自治を希求してやまなかった近代の市民が理想とする言葉ばかりである。身命を賭した市民の活躍なくしては、多元性と自由の気風を誇りとする西洋文明もその画竜点睛を欠く結果となったことであろう。福沢理論における市民的自治論の比重の高さを改めて確認しておきたいと思う。

自由主義社会の統合原理 ところで、福沢諭吉が西洋の歴史的伝統の中から抽出した右の①②③に凝集されている自由主義の原理は、それ自体として大変に貴重なものではあるが、もしそのような原理だけが存在して多様性と多元性を主張しあうばかりでは、社会が求心力を失って分散化してしまうであろう。すなわち、もし西洋の歴史が自由主義と分散主義を教えるだけのことならば、対外的に独立した主体的国民国家の創出を願う福沢にとって、西洋は必ずしも望ましいモデルとはならなかったはずである。しかし、西洋の社会構成原理は単に分散の契機だけでなく、同時に統合の契機をもその内に秘めたダイナミックなものであった。

福沢は西洋に見られてわが国には存在しないダイナミックな統合の契機に対しても驚きの目を向け、そこから多く

資料4 西洋の社会構成原理

西洋諸国の人民、必ずしも智者のみに非ず。然るに其仲間を結て事を行ひ、世間の実跡に顕はるゝ所を見れば、智者の処に似たるもの多し。国内の事務、悉皆仲間の申合せに非ざるはなし。政府も仲間の申合せにて、議事院なるものあり。商売も仲間の組合にて、コンペニなるものあり。学者にも仲間あり、寺にも仲間あり。僻遠の村落に至るまでも、小民各仲間を結て公私の事務を相談するの風なり。既に仲間を分てば其仲間毎に各固有の議論なきを得ず。譬へば数名の朋友歟、又は二、三軒の近隣にて仲間を結べば、乃ち其仲間に固有の説あり。合して一村と為れば一村の説あり。一州と為り一郡と為れば、亦一州一郡の説あり。此の説と彼の説と相合して少しく趣を変じ、又合し又併せて遂に一国の衆論を定むることにて、其趣は恰も若干の兵士を集めて小隊と為し、合して中隊と為し、又併せて大隊と為すが如し。大隊の力はよく敵に向て戦う可しと雖ども、其兵士の一己に就て見れば、必ずしも勇士のみに非ず。故に大隊の力は、兵士各個の力に非ず、其隊を結たるがために別に生じるものと云ふ可し。

今一国の衆論も、其定りたる上にて之を見れば、頗る高尚にして有力なれども、其然る由縁は、高尚にして有力なる人物の唱へたるが故のみを以て議論の盛なるに非ず。此議論に雷同する仲間の組合宜しきを得て、仲間一般の内に於て自から議論の勇氣を生じたるものなり。

『文明論之概略』、選集④94—95頁、全集④133頁。

のことを学ぶのである。①西洋人は仲間（自発的結社）を結成するのが優れていること、②同職組合・会社・学会、宗教組織など、いずれも自発的結社が社会の主要な構成要素であること、③自発的結社はそれぞれ公私の事務に関して固有の関心と意志を有していること、④朋友・近隣に始まり、一村↓一郡↓一州↓一国へと連なるそれぞれのレベルにおいて、それぞれ固有の説があり、それが相互に競争しあうことによって有機的關係が生じて強力な国民国家を形成するエネルギーになっていること、等々（資料4参照）。

資料4の中で、福沢の地方自治観を理解するうえでとくに重要だと思うのは、「近隣にて仲間を結べば、乃ち其仲間^{すなわ}に固有の説あり。合して一村と為れば一村の説あり。一州と為り一郡と為れば、亦一州一郡の説あり。此の説と彼の説と相合^{あいがっ}して少しく趣を変じ、又合し又併せて遂に一国の衆論を定むる」云々の一節であろう。福沢によれば、

西洋と東洋の違いは、様々のレベルにおける自発的結社が重層的に結合して合力となり、その合力が強力な国民国家を支えているか否かに求められる。すなわち、西洋人を一人一人観察してみれば愚かな者も多いが、国全体として見ればかくも偉大な文明を築きあげて世界に君臨しているその秘密は何か。それは他でもなく西洋の市民社会の自治的重層構造にある、というのが福沢の理解であった。^⑧

小括 以上、第一章―第三章では、西洋の自治都市に対して福沢諭吉がどのような認識に達していたかを紹介し、あわせて彼の地方自治観の原点を確認した。国民国家の創出を願う福沢にとって、西洋はまさに良きモデルであったことが理解できたであろう。福沢は西洋の歴史をひもとくことによって、いかにすれば自由の原理を獲得することができるかだけでなく、いかにすれば国民の自発性に依拠した統合化の契機を見い出すことができるかをしっかりと学んだのである。すなわち、近代国家が解かなければならない集中と民主のジレンマを調和させるものとしての、地方自治の意義を発見するうえにおいて、西洋の市民社会は学ぶに足る世界であったといえよう。さて、つぎに第四章以下では、福沢が西洋の市民社会から学んだ理論で日本の現実をいかに観察し、いかに批判するかを概観し、福沢の地方自治観が徐々に形成されていく過程を素描しておきたいと思う。

〔注〕

- (1) 『文明論之概略』、選集④一五九―一六〇頁〔全集④二三三頁〕。
- (2) 同右、選集④一六〇頁〔全集④一三四頁〕。
- (3) 福沢はフランスの政治家であり歴史家であったフランソワ・ギゾー (François Guizot) の著書を英訳本 (S. Henry, General History of Civilization in Europe, 1842) で読み、多くの影響を受けている。また周知のように、福沢はイギリスの歴史家トーマス・バッケルの『英国文明史』(Thomas Buckle, Introduction to the History of Civilization in England, 1875-1861) から多くのことを学んでいる。

- (4) 『覚書』、選集⑫六頁〔全集⑦六五七頁〕。
- (5) 同右、選集⑫七頁〔全集⑦六五八頁〕。
- (6) 同右、選集⑫一五頁〔全集⑦六六六頁〕。
- (7) 『文明論之概略』、選集④三〇頁〔全集④二四頁〕。
- (8) 西洋人に比べ日本人は衆議による人間の組合せがたいへん下手で、「三人會議して却て文殊の愚を呈し、会する者いよいよ多ければ其愚いよいよ甚だしく、会して事を理するに非ずして却て之を紊ること多し（『治安小言』、選集⑥二四九頁、全集⑥一〇七頁）」というのがわが国の特徴であると福沢は見なしていた。こうした日本における自治的秩序の形成力のなさについては、福沢は終始、容赦のない批判を加えている。別稿で改めて紹介するつもりである。

四 名分論批判とルールの精神

惑溺の弊害 福沢諭吉は西洋文明史から、自由の元素は異説争論の間に生じるといふ根本命題を学んだ。そして、その根本命題を体现しているのが他でもなく市民であることを確認した。自由の元素であり、自由の氣風を担う市民の誕生、すなわち品位と進取の氣象に富んだ近代市民すなわちミドルクラスがわが国にも成長すること、それが福沢諭吉の念願であった。そして、ミドルクラスによって担われる市民社会を基礎に自治的重層構造を築きあげて、強靱な国民国家を創出すること、それも福沢の畢生の念願であった。しかし、西洋の文明と市民社会の精神を念頭に置いて日本の現実を観察してみると、そこに潜むギャップは大きかった。

まず何が最大の問題となるか。福沢は、即座に価値観が一点に集中する「惑溺」^①の広汎な存在を指摘する。そして、この惑溺によってものの見方や関心が画一化するわが国の傾向に対して、福沢は「単一の説を守れば、其説の性質は仮令^{たと}ひ純情善良なるも、之に由て決して自由の氣を生ず可らず」^②と批判している。惑溺が甚だしくなれば、人々の中

に多様な発想が生じる余地がなくなり、複数の可能性の間で選沢するチャンスが失われて精神が閉塞状態に陥るからである。「都て人類の働は愈単一なれば其心愈専ならざるを得ず。其心愈専なれば其権力愈偏せざるを得ず」というのが、福沢の惑溺観であった。

名分論批判 この福沢の惑溺観に関連して、ここで注目すべきは『学問のすゝめ』第五編（明治七年）に登場してくる福沢の名分論批判である。福沢は周知のように名分をやかましく言う儒教には手厳しい批判を加えたが、その名分論批判は簡にして要を得ており重要である。

福沢はまず名分論の由来について、その本意は必ずしも為政者の悪念より生じたものではないが、基本的には人民を愚かで善なる者と決め付け、あたかも世の中の人間交際を「親子の間柄」のようになさんとする趣意から生まれたものであると観察する。そして、たとえ善意から出たものであれ、名分論は要するに目上の人の手心だけで万事を計い、かりそめにも人民の側から自分の了簡を出させないようにする牧民思想であり、偽君子を生む温床であると批判している。このように批判したあとで福沢は、「一国と云ひ一村と云ひ、政府と云い会社と云ひ、都て人間の交際と名るものは、皆大人と大人との仲間なり、他人と他人との附合なり」と断じて、この大人どうしの他人づきあい（^④）に実の親子の流儀を用いようとするのは無理であると結んでいる。

国家や町村を家族関係の拡大とは見ずに、名分論が立ち入る余地のないゲゼルシャフトの世界、ルールの精神が支配すべき世界として捉えるという視点は、福沢の地方自治論を理解していくうえにおいて重要である。

ルールの精神 ルールの精神を確立するためには、家族的雰囲気と情実主義の中に胚胎する専制と卑屈の気風を一掃しなければならない。福沢諭吉は、「他人と他人との附合には情実を用ゆ可らず、必ず規則なる者を作り、互に之を守て厘毛の差を争ひ、双方共に却て円く治る」ようにすべきであると述べている。この福沢の見地は、客観的基準

に基づかない仁政主義というものがとかく御恩の強制に陥って、御恩は変じて迷惑となり、仁政は化して苛法となることへのアンチテーゼとして出されたものである。^⑥

福沢はまた『文明論之概略』巻之四の中でも、わざわざ「知徳の行はる可き時代と場所を論ず」という一章をおこして、政府と人民の間、あるいは人民と人民の間での法治主義の意義を論じている。福沢は決して法律万能主義者ではない。しかし福沢によれば、西洋が今日あるような高度の文明を築くに至った大きな秘密は、天然の法則を認識してそれを生産に応用しただけでなく、人事に關しても人の性質と働きを探究してそれに合わせた「定則」を發明し、諸個人の自由な活動を保障した点にあったとされる。^⑦ 福沢は、「法律密にして国に冤罪少なく、商法明にして人に便利を増し、会社の法、正しくして大業を企る者多く、租税の法、巧にして私有を失ふ者少なし」と言っている。^⑧ あるいはまた、「民庶會議は以て政府の過強を平均す可し、著書新聞は以て強大の暴挙を防ぐ可し」とも述べている。^⑨ 福沢がいかにルールの精神を重んじ、権力の平均を願う思想家であったかが理解できるであろう。

国權可分の説 なお福沢諭吉は、『文明論之概略』を刊行した半年後に『国權可分の説』（明治八年）を書いて、次のように提言している。

「今の国權を平均して、政府と人民と相半せんとするには、左院なり元老院なり、地方官會議なり民撰議院なり、市会なり区会なり、或は立合取締と云ふも可なり、或は吟味検査と云ふも可なり、其体裁を問はず、其名目を論ぜず、東西にても、左右にても、公私にても、上下にても、唯双方に分れて互に相制するの法を設けざる可らず。」^⑩

右の提言に関連させて福沢はまた、官民間の論争をユーモアたっぷりに相撲の取り組みにたとえて、「今日の急務は、人民と政府と東西に分れ、其番付を定めて約束を立つる事なり」とも述べている。^⑪ これは加藤弘之の民撰議院時期尚早論を暗に批判して公表したものであるが、^⑫ ルールの精神を重んじる発想が権力分立論、ひいては地方自治論と

どのように関わってくるかを示しており興味深い。福沢の意図は、第一に政府と人民の区別を明確にして、政府に權威、人民に氣力を与えること、第二にそのためには国家や社会の様々のレベルにおいて客観的ルールを設定し、国権の分権化をはかることであつた。

福沢は二年後にトクヴィルに触発されて『分権論』（明治一〇年）を書くが、その下地はすでにこの頃から準備されていたといえよう。

〔注〕

- (1) 「惑溺」は福沢理論における一つのキー・タームであるが、その初出は『文明論之概略』第二章「西洋の文明を目的とする事」（選集④二二頁、全集④一七頁）。
- (2) 同右、選集④三〇頁〔全集④二四頁〕。
- (3) 同右、選集④二八頁〔全集④二三頁〕。
- (4) 『学問のすゝめ』、選集③一二六—一二七頁〔全集③九六—九七頁〕。
- (5) 同右、選集③一二八頁〔全集③九八頁〕。
- (6) 同右。
- (7) 福沢は「方今西洋諸国の有様を見るに、人智日に進て敢為の勇力を増し、恰も天地の間には、天然の物にても人為の事にても、人の思想を妨るものなきが如くして、自由に事物の理を究め、自由に之に應ずるの法を工夫し、天然の物に就ては、既に其性質を知り又其働を知り、其性に從て之を御するの定則を發明したるもの甚だ多し。人事に就ても亦、斯の如し。人類の性質と働とを推究して、漸く其定則を窺ひ、其性と働とに從て之を御するの法を得んとするの勢に進めり」（『文明論之概略』、選集④一五九頁、全集④一三三—一三三頁）と述べている。福沢のルール観を端的に示す一節といえよう。
- (8) 同右、選集④一五九頁〔全集④一三三頁〕。
- (9) 同右。
- (10) 『国権可分の説』、全集①五三七頁。

(11) 同右、五三六頁。

(12) 石井良助「明六社会談論筆記」、『日本歴史』一九五八年一月号、参照。また全集②二九六—二九九頁参照。

五 権力偏重批判と人間交際概念

権力の偏重 福沢諭吉は、西洋と比較すると日本には惑溺の傾向が強いが、それは「権力偏重」⁽¹⁾という構造に規定されているからであると見る。ここで権力偏重とは福沢特有の術語であるが、それは文字どおり権力が分散せず一方に偏っているという状態を指す言葉である。すなわち、西洋のように諸説が並立・競争して一種の化合物のような社会を形成するのではなく、「必ず片重片軽、一を以て他を滅し、他をして其本色を顕はすを得せしめざる」⁽²⁾といった一方的な支配関係を表わす概念である。

この語を説明して、福沢は「日本にて権力の偏重なるは、^{あま}治ねく其人間交際中に浸潤して、至らざる所なし」⁽³⁾と述べている。世の学者が権力のことを論じる場合には、とかく政府と人民との関係だけを取り上げて、政府の専制を怒ったりあるいは人民の跋扈を咎める者が多い。しかし、事実をよく吟味してみれば、官吏と人民、大藩と小藩、本山と末寺、上役と下役などの関係にとどまらず、師弟・親子・兄弟・男女の間柄に至るまで権力の偏重が認められるであろう。すなわち、人間交際の至大なるものより至小なるものに至るまで、事の大小、公私にかかわらず、わが国においてはいやしくも交際あるところ必ず権力偏重あり、⁽⁴⁾というのが福沢の観察であった。

人間交際概念 このように福沢諭吉は、政府対人民という狭義の権力関係だけでなく、広く「人間交際」の次元をすべて重視して、そこに権力偏重の因子を見ようとするわけであるが、それでは言うところの人間交際とは何か。人間交際とは society の訳語で、それは『文明論之概略』だけでなく、すでに『学問のすゝめ』の中にも頻出して

いた基本概念である。それゆえ、福沢の理論を理解しようとすれば、人間交際という用語はどうしても読み飛ばすことができないものの一つとなる。

今日では、*society* といえば誰も「社会」と訳して疑わないが、少なくとも一八七六（明治九）年以前の段階では社会という訳語が福沢の著書には登場しない。それでは、誰が最初に社会という訳語を考案したか。この点については専門家の間でもはっきりしないが、いずれにしろそれが使用され始めたのは明治八、九年頃のことらしく、*society* の日本語訳には随分と苦勞した様子がうかがわれるのである。^⑤ 昔から日本には人間の上下関係や一体感を示す「くに」という観念は発達していたが、自由な諸個人（市民）のヨコの結合関係を示す *society* に該当する観念が存在しなかったからである。

わが国には存在しなかった *society* の観念の重要性にいち早く気付いた福沢は、さっそくその観念を駆使して、縦横無人に日本的人間交際の基層に潜む問題点を斬っていくのである。批判の視点は、言うまでもなく、なぜわが国には市民の観念や自治の観念、あるいは公共の観念が明確な形では存在しなかったのかと執拗に問うことであった。人間交際という基層部分をしっかりと凝視せずに一挙に国民国家の創出を説くのは、まさに砂上に樓閣を築くようなものだ、と福沢が信じたからである。

政治は人間交際の一小部分 人間交際の次元を重視する福沢諭吉は、君主専制家と共和政治家、はては皇統連綿を唱える旧神道の神主やフランスの流の「レッドレパブリカン」を一括して、「其主張する所の説こそ異なれ、一国の政府を極めて有力なるものと思ひ、政府を改革すれば国の有様は思のまゝに進歩するものと心得、事物を信ずるの度に過るは、此も彼も同一様にして、何れも政府は唯人事の一小部分たりとの義を知らざるものなり」^⑥と断定している。要するに、政府の形態の問題は言うまでもなく、政治すらも実は「人事の一小部分」であるから、その基層にあって

政治のあり方を規定している人間交際、すなわち日常的現象の中における権力偏重の諸形態を改革しようとする問題意識なくしては、政治改革論はいずれも無に帰するだろうというのが福沢の言いたい点であった。⁽⁷⁾かくして、たとえば次のような形で進行する権力偏重の日常的現象形態を、一つ一つ克服していくことが、福沢にとっての理論的課題となる。

「政府の吏人が平民に対して威を振ふ趣を見ればこそ、権あるに似たれども、此吏人が政府中に在て上級の者に対するときは、其抑圧を受けること、平民が吏人に対するよりも尚甚しきものあり。譬へば地方の下役等が、村の名主を呼出して事を談ずるときは、其傲慢^{ごうまん}厭ふ可きが如くなれども、此下役が長官に接する有様を見れば、亦慙笑^{びんしょう}に堪へたり。名主が下役に逢ふて、無理に叱らるゝ模様は氣の毒なれども、村に帰て小前の者を無理に叱る有様を見れば亦惡^{にく}む可し。⁽⁸⁾」

〔注〕

- (1) 「権力偏重」という概念の初出は『文明論之概略』第九章「日本文明の由来」(選集④一七二頁、全集④一四六頁)。
- (2) 同右、選集④一七二頁(全集④一四五頁)。
- (3) 同右、選集④一七三頁(全集④一四六頁)。
- (4) 同右、選集④一七三―一七四頁(全集④一四六―一四七頁)。
- (5) 伊藤正雄『福沢諭吉論考』(吉川弘文館、一九六九年)、六三―六四頁参照。なお、パブリックの觀念と関連する「會議」[演説]という言葉も福沢が考案した訳語である(丸山眞男『文明論之概略を読む』上巻、岩波書店、一九八六年、八二―八三頁参照)。
- (6) 『覺書』、選集②八頁(全集⑦六五九頁)。こうした政治至上主義的ものの見方を批判し、人間交際の次元を重視しようとする視点は『文明論之概略』の中にも一貫しているところで、福沢は同書の第三章「文明の本旨を論ず」において「立君の

政治、必ずしも良ならず、合衆の政治、必ずしも便ならず。政治の名を何と名るも、必竟、人間交際中の一箇条たるに過ぎざれば、僅に其一箇条の体裁を見て、文明の本旨を判断す可らず。其体裁果して不便利ならば、之を改るも可なり、或は事実に妨なくば、之を改めざるも可なり。人間の目的は唯文明に達するの一事あるのみ。之に達せんとするには、様々の方便なかる可らず。随て之を試み、随て之を改め、千百の試験を経て、其際に多少の進歩を為す可きものなれば、人の思想は一方に偏す可らず。綽々然として余裕あらんことを要するなり」(選集、第四卷、五九頁)と述べている。政治至上主義の批判だけでなく、政治を功利主義的にとらえる見方や試行錯誤の過程としてとらえる見方など、福沢理論の特徴が端的に表現されている一節といえよう。福沢の地方自治論を理解するうえにおいて重要な点である。福沢の思想がもつ近代性格については、丸山真男氏の「福沢における実学の転回」(東洋文化研究、第三号、一九四六年)と「福沢諭吉の哲学」(国家学会雑誌、第六一巻第三号、一九四七年)が先駆的業績。

(7) 人間交際の次元に着目する福沢の視点には、実に鋭いものがあつた。ただし、「政治は人間交際の中の一箇条」という視点は、陸羯南から後年「社交上の急進家にして政治上の保守家」(『近時政論考』、陸羯南全集、第一巻、みすず書房、一九六八年、四〇頁)と批判されたように、福沢の理論には社会の改革が先であるとして政治の改革をあとに回す傾向があつた。津田左右吉も福沢を評して、「ことがらによっては保守的の見解をもつてゐた」(『文明論之概略』岩波文庫版、一九六二年、解題)と述べている。そうした点については続稿で触れるつもりである。

(8) 『文明論之概略』、選集④一七四頁〔全集④一四七頁〕。福沢は日常的现象の中に問題を発見するのがたいへん得意な思想家である。たとえば、明治五年の頃、ユーモリスト福沢は摂津の三田に行く道中で百姓町人に色々な態度で接してみても相手の反応を試したことがあるが、そこから得た福沢の理論的ヒントは、「如何にも是れは仕様のない奴等だ。誰も彼も小さくなるなら小さくなり、横風なら横風で可し。斯う何うも先方の人を見て自分の身を伸縮するやうな事では仕様がない。推して知るべし、地方小役人等の威張るのも無理はない。世間に圧制政府と云ふ説があるが、是れは政府の圧制ではない。人民の方から圧制を招くのだ。之を何うして呉れやうか」というものであつた(『福翁自伝』、選集⑩二三五頁、全集⑦一八九頁)。福沢の地方自治論の源泉はもとより西洋の自治都市にあつたわけだが、他方こうした日常的体験の中からも多くのヒントを得て、本文に引用したように含蓄ある一文を思いついたのであろう。

六 ミドルクラスへの期待と不安

自治意識の喚起 名分論を批判して一町一村の中にもルールの精神を確立していくためには、まず何かなされなければならぬか。あるいはまた、権力の偏重を打破し社会の隅々において自発的結社精神を呼び覚ますためには、最小限、何かなされなければならぬか。それはなによりもまず、唯々諾々として目上の者や役人に従うわが日本人民を啓蒙して、批判的自治精神を日常生活の中に定着させることから始めなければならない。

克服すべき課題は二つある。第一は、伝統的無関心の克服である。福沢諭吉によれば、そもそもわが国の人民に氣力がないのはなぜかといえ、それは昔から全国の権柄を政府が一手に握り、武備文学より工業商売に至るまで日常些末の事務といえども政府の関与しないものがなかったからである。すなわち、その結果、人民はただ政府が指図するところに向って奔走するのみで、あたかも国は政府の「私有」にして、人民は国の「食客」のごとし、という伝統的無関心が全国に蔓延してしまつたからである。⁽¹⁾ あわせて第二に、福沢にとってもっと深刻な問題と映じたのは、「今、日本の有様を見るに、文明の形は進むに似たれども、文明の精神たる人民の氣力は、日に退歩に赴けり⁽²⁾」という近代的不関心の拡大であつた。

明治維新の後いまだ十年にもならないが、学校・兵備・建物・鉄道・電信など有形の文明はまさに日進月歩の勢いで、人民の耳目を驚かすに十分のものがある。しかし問題は、そうした文明の成果がいずれも政府の手によって成し遂げられているために、ますます人民の中に政府依存の氣風が強まり、新しい形の無関心——自治意識のいっそうの喪失——を再生産し続けているという点であつた。福沢は、明治維新以後かえって「政府は啻に力あるのみならず兼て又智あり、我輩の遠く及ぶ所に非ず、政府は雲上に在て国を司り、我輩は下に居てこれに依頼するのみ、国を患ふ⁽³⁾

るは上の任なり、下賤の関る所に非ず^③」との氣風が人民の中に強まってきたと見ている。そして、昔の政府は人民の力を挫いたが今の政府は人民の心を奪っている、と結論づけている。

文明とは決して「物」の問題ではなく、あくまでも「ものの見方」の問題であるとする福沢にとって、物の進歩がかえって人間の氣力を退歩させ、自治意識のいっそうの後退をもたらしているという現象はきわめて危険な動向であった。

日本のミドルクラス それでは人民内部における新旧の無関心を克服して、自治意識を高めていくための指導力は、これをどこに求めればよいか。福沢諭吉は、ここでも「国の文明は、上政府より起る可らず、下小民より生ず可らず、必ず其中間より興^{おこ}て衆庶の向ふ所を示し、政府と並立て、始て成功を期す可きなり^④」という命題で、西洋の市民社会に学ぶのである。福沢が西洋の市民社会から学んだことは、第一に商工業の道はひとつとして政府の創造したものはなく、ワットやアダム・スミスなど学者の心匠より生まれたものばかりであるという点、第二に知力で一世を指揮した学者はいずれも皆ミドルクラスたる市民の出身であって、国の役人でもなければ力役の小民でもないという点、第三に彼らミドルクラスは「私立の社友」すなわち自立的紐帯を結んで政府と対等の関係にあったという点、等々であった^⑤。

ただし、市民不在というわが国の現状を反映してであろう。福沢は明治初期の段階では日本におけるミドルクラスとは何かについて積極的な定義を下すことができず、齒切れの悪い表現に終始するのである。第一に、「今我国に於て、彼のミッゾルカラッスの地位に居り、文明を首唱して国の独立を維持す可き者は、唯一種の学者のみ^⑥」と述べて、ミドルクラス＝学者（知識人）という把握にとどめざるをえなかったという問題がある。わが国においては西洋の市民に匹敵する「財産と教養ある階級」が存在しなかったために、単に「教養ある階級」すなわち学者に期待せざるを

えないのが現状であった。第二に、わが国の学者の実態は必ずしも前途樂觀できるようなものではなかったという問題もある。福沢は『学問のすゝめ』の中で、日本の学者は全体として国の運命に無関心であるとか、官途依存型の人物が多いときびしく批判している。⁷ また福沢は別のところで、当時の日本の学者を評して「固より此人物とて日本相応の人物なれば最上のものに非ずと雖ども粗末は粗末ながら百姓車挽に比すれば遙に上流に在て」云々、と実に辛辣な言葉を投げ掛けている。

しかし、結局のところは、日本の学者は粗末ながらも今の国事に用いて差し支えなく、仮に差し支えがあるにしても彼らを除いて政府の専制に抗する者は見当らない、⁸ というのが福沢理論の落ち着く先であった。わが国の現状には不満であるが、ともかくもミドルクラスたる学者を歴史の推進力、自治の担い手として評価し、彼らの活躍に前途を託すほかないというわけである。

名望家囑望論 このように、福沢諭吉のミドルクラス論は歯切れが悪く、¹⁰ 続稿で見えていくように時代により若干の変化を見せた。だが、いかなる時代いかなる場所においても福沢が人民ないしは農民一般を歴史の推進力あるいは自治の担い手として評価したことはなく、その意味において彼の視点はつねに「人民の上流」たるミドルクラスの側に置かれていたと見て大過ないのである。そうした福沢のミドルクラスの視点は、明治初期の農民運動を口をきわめて罵ったり、¹¹ 田舎の戸長の無学ぶりを揶揄したりする口調のなかにも鮮明に表れているが、今その最たるものを『国権可分の論』の中から引いておくならば、「百姓車挽の学問を進めて其気力の生ずるを待つは、杉苗を殖（植）へて帆柱を求めるが如し。法外なる望ならずや」¹² という一文などがその好例となろう。

福沢はまた次のようにも述べている。

「試に見よ。方今世界中にて至文至明と称する英国に於ても其下流の人民に果して何等の学識を抱て何等の気力

を有する者あるや。終歲勉強して尚且、日に芋と藍とを得ず饑寒を免かるゝに汲々たり。何ぞ他を顧るに違あらん。何ぞ国を憂るに違あらん。何ぞ政を談ずるに違あらん。唯古来の習慣に由り上流の人に雷同して自から一国一州の衆議と称するものも定まることなり。然るに今国論は下より起る可き筈のものなりとて、無智の細民に依頼して政府の権力に対立せんとせば、英国にても時節未だ到来せざることならん。龍動の議事院を立るも尚早きことならん。此一段に至ては日本も英国も特に異別ある可らず。少しく西洋の事に通ずる者なれば是等の情実は明に知る可き筈なるに、学者の之を知らざるは迂遠と云ふ可きなり。^⑭

西洋諸国においても、「衆議」「国論」と称するものは決して下流の人民より生じた説ではない。いずれも皆ミドルクラス以上の学者士君子が主唱して、それに群民が雷同したものにはかならない。^⑮無知の細民が目覚めるのを待っていたのでは、いつになっても国会などできるものではない、というのが西洋史から得た福沢の確信であった。このように、福沢の理論には一種の愚民観が認められるのである。すなわち、財産と教養に恵まれた上流の市民（ミドルクラス）の活躍に期待しながら、それを基軸にして理論を組み立てているという意味で、福沢の地方自治論は明らかに名望家囑望論としての一面を有していたと見る事ができよう。

しかし、福沢にとって不幸なことに、わが国には西洋のようなミドルクラスが見当らない。わずかに、教養はあるが財産のない学者を見いだしうるのみであった。しかも彼らは全体として権力依存志向が強く、今すぐ自治権の担い手として期待するのは無理であるという難点があった。福沢の名望家囑望論の前途はまさに多難であったといえよう。

〔注〕

- (1) 『学問のすゝめ』、選集③八七―八八頁〔全集③五九頁〕参照。
- (2) 同右、選集③八八頁〔全集③五九頁〕。

(3) 同右。

(4) 同右、選集③八九頁〔全集③六〇頁〕。

(5) 同右。

(6) 同右、選集③九〇頁〔全集③六一頁〕。もっとも、そうした不十分さは『分権論』や『通俗民権論』など後年の著書の中で徐々に補われていき、それとともにミドルクラスの意味内容も時代とともに「学者」↓「士族」↓「財産家」へと変容し、そのことが福沢の地方自治論に微妙な変化を与えることになるが、そうした点については続稿に譲る。

(7) 同右。

(8) 『国権可分の説』、全集⑩五三二頁。

(9) 同右。

(10) 福沢は中間層の内容を明確に規定することができなかった。そのため『学問のすゝめ』など初期の著作においては全国民を対象にした話法で論述するほかなく、そのことがかえって福沢理論に特有の説得力と普遍性を付与することになったといわれている（ひろたまさき『福沢諭吉研究』、東京大学出版会、一九七六年、七五頁参照）。

(11) 家永三郎氏は、福沢が『学問のすゝめ』の中で農民の強訴や一揆に対して口をきわめて罵っている箇所を批判して、「明治初年の農民が、維新以来の耕作農民に対する負担の激増と農村の慣行の破壊とによる生活苦にたえかねて、全国各地で頻々と一揆を起していた事実を背景としてこれらの文を読むならば、福沢がまったく農民の立場を無視した明治政府の専制主義的政策と同一の視点に立っていたことは、おそらく何人といえども否定できないに相違ない」と述べている（「福沢諭吉の人と思想」、現代日本思想大系第二巻『福沢諭吉』、二八頁）。

(12) 福沢が田舎の戸長の無学ぶりを揶揄した文章には事欠かないが、その一例として次のような一節を紹介しておく。「彼の不学無文、何等の教育もなき田舎漢が人に逢ふとき、動もすれば物知り顔して訛難りの漢語を用ひ、手紙の文字も御家流を廃して妙な字体に認め、不文ながらも何か理屈がましく野紙などに書き並べたるもの多し。我輩は之を評して村吏有志者口調と称し、唯一笑に附するのみなれども、退て考れば、天下の言語文書漸く書生の為めに横領せられたるの証として視る可きものなり」（『実業論』、選集⑧二七二—二七三頁、全集⑦六六二頁）。福沢の理論が豪農層にどのように受け取られて、どのような影響を与えたかについては、今後とも研究していかなければならない重要テーマである（ひろたまさき、前掲、一

五一―一六一頁参照）。福沢と豪農層（地方名望家）の関係については、長沼事件、春日井事件との関連で続稿で詳述する。

(13) 『国権可分の説』、全集⑩五三二頁。

(14) 同右、五三二頁。

(15) 同右、五二六―五二七頁。

七 国民国家の基盤を求めて

外国交際と国民の気力 福沢諭吉はまだ具体的な形では地方自治論を展開していない。いわば散発的に、市民的自治論の萌芽を行間に垣間見せている程度である。しかし、『文明論之概略』においては『西洋事情』の場合とは違って、輪郭のはっきりした理論的枠組みとの関係で地方自治の意義が説かれ始めていたという点が見逃されてはならないであろう。すなわち、「日本には政府ありて国民（ネーション）なし^①」という現実を一日も早く克服するためには、まず権力偏重をあまねく日常的な次元で打破し、自発的結社精神を根付かせることから始めなければならないと福沢は繰り返し強調しているが、そうした主張と密接不可分の関係において地方自治の意義が確認されつつあったのが、この時期の特徴である。

福沢諭吉は、当時において解決しなければならぬ最大の国民的課題を次のような文章で表現している。

「今、我日本は外国人と利を争ふて理を闘^{たたか}する時なり。内に居て澹泊^{たんぱく}なる者は外に対しても亦澹泊ならざるを得ず、内に愚鈍なる者は外に活発なるを得ず。士民の愚鈍澹泊は、政府の専制には便利なれども、此士民を頼て外国の交際は甚だ覺束なし。一国の人民として地方の利害を論ずるの氣象なく、一人の人として独一個^{どくいつこ}の榮辱を重んずるの勇力あらざれば、何事を談ずるも無益なるのみ。蓋^{けだ}し其氣象なく又其勇力なきは、天然の欠点に非ず、習慣に由て失ふたるものなれば、之を恢復するの法も亦習慣に由らざれば叶ふ可らず。習慣を変ずること大なりと云ふ

可し。⁽²⁾」

今日はまさに西洋列強と対峙して日本の独立を確保しなければならぬときである。この決定的瞬間において、わが日本人に「インヂヴヰヂュアリチ」individuality⁽³⁾なく、「ロカルインテレスト」も「カラスインテレスト」もなく、「コンペニ」companyも「ネーション」nationもなしということでは外国交際は覚束ない、というのが福沢の憂慮であつた。

政治的集中と国民の自発性 西洋列強と対峙することのできる強力な国民国家を創出するためには、政治的集中が必要不可欠である。しかし、政治的集中が地域に根ざす社会的諸活動を伴わなければ、強い国民国家を作り出すことはできないであろう。中央の権力がすべての価値を独占すれば、社会の内部には無関心と無氣力が支配的となつて国民国家がその基盤を失うからである。それではどうすればよいか。政治的集中と国民の自発性を結合させた国民国家を創出するためには、いま何をしなければならないか。

思うに、わが国には国民国家の基盤となる自治組織があまりにも脆弱である。西洋には自由の原理と統合の原理が二つながら存在していた。対するに、わが日本には自由の原理も統合の原理も存在しない。というよりも、そもそも人間のヨコの関係を示す社会の觀念や公共の觀念に乏しく、日常的次元での衆議の習慣さえも存在しない。福沢はこうしたわが国の現状を批判して、

「暴政府の風にて、故^{こと}さらに徒党を禁ずるの法を設て人の集議を妨げ、人民も亦^{ひたすら}只管無事を欲するの心よりして、徒党と集議との區別を弁論する氣力もなく、唯政府に依頼して国事に関らず、百万の人は百万の心を抱て各一家の内に閉居し、戸外は恰^{あたか}も外国の如くして、嘗^{かつ}て心に関することなく、井戸浚^{さら}の相談も出来難し、況や道普請に於てをや。行斃^{ゆきだおれ}を見れば走て過ぎ、犬の糞に逢へば避けて通り、俗に所謂掛り合^{のが}を遁るゝに忙はしければ、何ぞ集議を

企るに違あらん。習慣の久しき、其風俗を成し、遂に今の有様に陥りたるなり。」^④

と述べている。暴政府が衆議を禁止するから人民の内部に衆議の習慣が育たないのか、あるいは人民の内部においてそもそも公共心が乏しいから衆議の習慣が育たないのかは、相互規定的で、にわかには決しがたい。だが福沢にとって確かなことは、衆議の習慣が人民の日常生活の中に容易に定着しないという悪循環はどこかで断ち切らなければならず、もしそれができないようでは国民国家の創出は覚束ないということであった。

一国の人民として地方の利害を論じる気象がなく、一人の人として一個の榮辱を重んじる勇氣がなければ、何事を談じても無益である、とはまさに至言といふべきである。

〔注〕

- (1) 『文明論之概略』、選集④一八三頁〔全集④一五四頁〕。
- (2) 同右、選集④九七—九八頁〔全集④八〇—八一頁〕。
- (3) 同右、選集④一九八頁〔全集④一六六頁〕。individuality を福沢は「独一個人の気象」と訳している。
- (4) 同右、選集④九五—九六頁〔全集④七九頁〕。
- (5) 衆議の慣習がなくしかも卓越した人物がない場合には、リーダーシップが容易に確立せず、どんぐりの背くらべ的「足引きと世話焼き」の現象が顕著となるであろう。福沢はそうしたわが国における自治的秩序形成力の弱さを鋭く見抜いていた。まず国の頂点においては、「爰に極めて重要な所望は、諸老輩が平生の自負心、高慢心、驕傲心、功名心を収めて、相互に我慢し、相互に譲り、忍ぶ可からざるを忍んで、自から自身を抑制し、以て他の運動を自由ならしむることなり。即ち之を俗に云へば、等しく政府の中に居て、役不足を云はず、誰れにても一名の長者を推して首座に置き、其人の智愚緩急を問はずして、理にも非にも得にも失にも、都て其指揮に従て運動することなり。」（『治安小言』、選集⑥二四七—二四八頁、全集⑥一〇五頁）ということが繰り返し強調されなければならなかったという問題。国の底辺においては、「人民が事を行ふには目的を定ること固からず。或は之を定るも、仲間の中に様々の異論を生じ、自から建て、自から毀ち、徒に時日

を費して緩慢に互るの弊を免れず。些細の事なりと雖ども、葬式の出で立ち、無尽講の会席に、混雑の多きを見ても之を知る可し。故に官の事は財を失ひ、人民の事は時を失ふと云ふも可なり。蓋し威力を恐怖して命に従ふに慣れたる者なれば、官と名の威力を除けば、事物の順序も共に消散して、恰も無首の手足が其運動を自在にするが如し。」（『分権論』、選集⑤七四頁、全集④二八七—二八八頁）という問題。

おわりに

(1) 本稿においては、福沢諭吉の初期の著作に対象を限定して、第一に、福沢が西洋の市民的自治に対してどのような理解に達していたかを紹介しながら、彼の地方自治観の原点を確認した。そして第二に、福沢が西洋の市民的自治から学び取った命題を武器にして日本の現実をいかに観察し、いかに批判しようとしたかを素描し、福沢の市民的自治論が徐々に形成されていく過程を概観してきた。

次の課題は、一八七五（明治八）年以降において、福沢の地方自治観がどのような展開を示すかをあとづけることである。そこで、福沢の地方自治観の展開過程を見ていくために、本稿に引き続き、時代順に『福沢諭吉の分権論—士族への期待』（大区小区制期後期）、『福沢諭吉の廃県論—民権運動の高揚』（三新法期）、『福沢諭吉の自治再生論—名望家自治の前途』（市制町村制期）、の三論文を予定している。論文のタイトルはそれぞれ異なるが、いずれも本稿で提示した問題を伏線にしながら展開するつもりなので、四編あわせて一論文と考えていただければ幸いである。

(2) ちなみに、四つの論文を通じて追求される主題は何か。それは、福沢諭吉の地方自治論に見られる「名望家自治を希求する視座」と「日常的現象を重視する視座」をできるだけ浮き彫りにすることである。すなわち、①自由な知識人の口から語られるところの「名望家自治囑望論」の形成と展開（期待と失望）の軌跡をたどって、その意味を考察すること、②あわせて自治に関する日常的諸現象を軽妙な筆致で描いた福沢の含蓄ある文章を紹介しながら、

「制度史と社会史の接点」を明晰に照らし出す福沢の方法に学ぶこと^①、それが全体を通じての論述の基軸となる。

福沢諭吉研究は汗牛充棟の観があると言われている。しかし、福沢については多様な解釈が可能であり、^②かつ地方自治論に対象を限定した研究は従来見当らない。ましてや、右の①②のような問題意識から福沢の地方自治論を取り上げたものはもちろん存在しないわけで、拙稿のように限定された初步的研究もまた、まったく意味がないとはいえないであろう。

〔注〕

(1) 福沢の著書には、①制度論と意識論の統一的把握、②日常性の重視、③自治の担い手の資質を問う視点、④欧米と日本の比較など、いずれも日本の自治の特質を究明していくうえでの貴重なものの見方が豊富に示唆されている。福沢理論の政治的役割や時代的被拘束性を論じるだけでなく、福沢から何を学ぶことができるかを追求してみることも、私としては大切なことだと考えている。拙著『近代日本の名望家と自治』（木鐸社、一九八七年）、五―八頁参照。

(2) 遠山茂樹氏は福沢の思想を評して、「いったいどこに彼の思想の本筋があるのか、読む人の思想にしたがって如何様にも読みとることを可能にするような思想」であるとしている。そして、「彼自身、自分の論旨を読者が幾様かの受けとり方をすることを意識して筆をとったとさえ思われるのである。したがって、後世の人が百人百様の諭吉観をつくりあげているのは、ある意味では当然であるとさえいうことができるのである」と述べている（『福沢諭吉』、東京大学出版会、一九七〇年、四頁）。

凡例 福沢諭吉の論文は、読者の便宜を考え原則として『福沢諭吉選集』（岩波書店）から引用した。『選集』に掲載されていない場合は『福沢諭吉全集』（岩波書店）から引用し、旧漢字を新漢字に改めた。また引用文中、振仮名は適宜割愛することにした。